

近代文化研究所所員勉強会（令和元年度）要旨

第1回 令和元年6月28日

「大嘗祭をめぐる」

日本工業大学教授 工藤 浩

令和元年十一月に、大嘗祭が三十一年ぶりに実施された。大幅な予算縮小の影響で、茅葺の悠紀殿、主基殿を板葺とするなどの措置が講じられた。大嘗祭は、一連の天皇即位の儀礼を締め括る重要な祭儀であるが、目的に関しては通過儀礼と天皇による神への献饌と共食の二通りの解釈に分かれ、祭祀の対象となる神についても九通りの説がある。大嘗祭の本質を捉え難くする大きな要因には、秘儀として祭儀の実態が公開されず、応仁の乱以降、近世の復興までの空白期間が二二一年に及んだことの二点が挙げられる。

大嘗祭の本質を、折口信夫は即位した天皇がマドコヲフスマに籠り天皇霊を身に着けることだと説いた。儀礼が、悠紀・主基殿で二度繰り返される理由が説明できないなどの問題を抱えながら、折口のマドコヲフスマ論が九十年を経た現在でも影響力を失っていない要因は、大嘗祭を天皇の資格完成のための通過儀礼と捉えた点にある。折口説の唯一の根拠とされるのは、『江次第抄』に引かれた『新儀式』の「内裏式云、縫殿寮供_三寝具_一者、天皇御_レ之者」の記事であり、傍線部を天皇が「寝具に入る」ことと解するのである。だが、大嘗祭の次第の中で、天皇は寝具に一切触れないことが近年指摘されている。「御」の字義から、これを天皇が皇祖神を迎えて神座に案内するために「寝具の前に進む」意と見れば、折口説は成り立ち得ないことになる。

神話は、発生から記・紀へ定着、更にはそれが享受される中で、時代の要請によって絶えず変化が繰り返されるが、祭儀についても同じことが言えよう。皇祖神アマテラスを祀ることが天皇にしか許されなかった七世紀末の天武・持統朝と、千三百年を経た今日の大嘗祭とが同じである筈はないのである。天孫降臨神話と大嘗祭とが互いに影響を及ぼし合いながら改変を重ねてきた過程の中で変化と変化の及ばない本質を、時代ごとの史料をもとに動的に辿ってゆくことが重要であろう。

第2回 令和元年7月10日

「京浜地域の浴場業と担い手たち ―都市移住者の視点から―」

横浜開港資料館調査研究員 吉田 律人

都市生活者に入浴の機会を提供する公衆浴場、「銭湯」の減少が叫ばれて久しい。平成が始まった30年前、1989（平成元）年の段階で、東京23区、川崎市、横浜市、横須賀市には合計で2262軒の銭湯があったが、2018年には623軒と、4分の1近くまで減少している。この背景には、家庭風呂の普及に加え、経営者の高齢化や施設の老朽化、燃料費の高騰などがあり、公衆衛生を担った施設は急速に消えつつある。その存在を記録に留め、後世に伝えていくためにも、今、改めて銭湯の歴史を見直す必要がある。

京浜地域の銭湯の歴史を追いかけていくと、浴場業の担い手の大部分が新潟県を含む北陸地方出身者であることに行き着く。特に昭和戦前期の東京は新潟県の西蒲原郡出身者が大きな勢力となっていた。そうした人々の郷里である蒲原平野の神社には、京浜地域で成功した浴場業者の寄進物が多く残っており、それらを体系的に分析していくことで、連鎖移動の構造や人的ネットワーク、郷里との関係を明らかにできる。

西蒲原郡の浴場業者輩出の中心地は、松長村（現、燕市）、漆山村（現、新潟市西蒲区）、道上村（同）の三ヶ村で、その結節点にあたる打越集落が起点の一つであった。同集落の宇智古志神社には、明治初期に成功した小林金吾や佐藤豊蔵の狛犬があるほか、その子分たちが大正期に寄進した鳥居や石橋なども存在する。また、集落内には、日本橋区呉服町で銭湯を営む柘倉奥太郎の石碑もあり、多くの人々が浴場業に従事していた。同様の寄進物は周囲の集落にも存在、人的ネットワークは大きく広がっていた。

昭和戦前期、全国浴場組合の組合長で、衆議院議員となる赤塚五郎は親戚の佐藤豊蔵を頼って浴場業界に進出、さらに赤塚は友人の田村虎太郎を新潟から呼び寄せた。赤塚の急死後、田村は後継者として台頭し、同郷者の活動を支えていく。西蒲原郡出身者は浴場業を介して京浜地域に根を張っていったのである。

第3回 令和元年10月30日

「『遠藤周作全日記』を刊行して ―遠藤周作の思い出と共に―」

日本ペンクラブ 今井 真理

『遠藤周作全日記』は二〇一八年五月に刊行された。本書は留学時代に書かれた『作家の日記』、今回初公開となる「病床日記」、また『沈黙』『侍』『スキャンダル』の創作ノートや雑誌等に掲載されていた日記などが集められたものである。つまり、遠藤が留学生として海を渡る一九五〇年から、死を前にした一九九三年、妻に口述筆記をさせてまで語り続けたその人生が日記を通して語られるのである。作家の日記はたとえば遠藤が熟読した永井荷風や、グレーム・グリーンなど数多く発表されているが、このように一人の作家の生涯をとおして綴られる日記は、貴重なものではないだろうか。今、青年から晩年までの全日記を読み返してみると、そこには他の作家とはまた違ったさまざまな形態がみえてくる。

その一つはこれらの日記が遠藤の膨大な「読書ノート」になっている点である。たとえば、一九五〇年十二月の日記からその書名を挙げてみると、デュ・ボス『日記』、ベルナノス『クロニク』、サルトル『文学とは何か』、フォークナー『音と怒り』『私がくるしんでいる時』、等々、読者は遠藤の膨大な読書量に圧倒される。遠藤がそれらを日記に記したのは、作家の芸術体験、読書体験こそが、作家の「大きな養分」になっていると考えたからである。つまり、遠藤が生きた歴史と同様に、彼の読書体験は「作家遠藤周作」の原点であり、彼の文学を考える上でもこの日記は重要な視点となる。

また、今回は創作ノートとして『侍』『深い河』などの日記が収録されたが、これらの日記は作品を読み解く手がかりとなることは勿論だが、そこには壮絶な病気との闘いと老いへの想いがあふれ出ている。特に『深い河』創作日記からは、常に病気と闘ってきた作家の命の痕跡が見えてくる。思えば「死」への恐怖や病気の辛さはこの時期に始まったわけではない。二十八歳の遠藤は次のような想いを吐露する。

「あと十年だけでも生きたい。このままで死にたくないのは、まだ、この地上がこの世界がどういふものかわからないからだ。／自分が何のためにこの地上で働かねばならぬかをやっと、みつけた所なのだ。あと十年だけでいいから生きたい」(1951・12)

遠藤周作という山に登るにはどこから登ってもかまわない。純文学小説でも狐狸庵シリーズでも、エッセイでも、それらの作品を読むことで、読者は遠藤と出会うことになる。それと同様に、この日記もまた、さまざまな読み方があるはずである。かつて訪れた仏蘭西を「人間の永遠の悲しみといったものが隠れている」(「フランスの街の夜」)街と綴った日々、なにげない人々の表情、夕暮れにすれ違ったフランス人の老女、ありきたりの光景を描きながらそこに「辛い愛の孤独」を感じる遠藤の姿勢は小説でも日記でも変わることはない。これらの日記で語られた幾つかのメッセージは作家遠藤にとって母なる神への率直な問いかけであり、それは紛れもなく遠藤周作の全作品を貫く一条の光となる。

第4回 令和元年11月20日

「近代における台所改革と女性の社会的地位向上」

一般社団法人 東京建築アクセスポイント代表 和田菜穂子

戦後日本はアメリカの影響を受け、「ダイニング・キッチン」という和製英語が示すように、台所内部に食事の場が設けられるようになった。台所は家庭の主婦が主役を演じる場として、自然光が差し込み、明るく清潔な場へと変化した。このような「台所改革」は戦後に始まったものではない。我が国では1910年代頃から大正デモクラシーの風潮のもと、「台所の改善・合理化」は「生活改善運動」の一つとして取り組まれていた課題であった。「台所の改善」は女性の家事労働の軽減に繋がるものであり、女性向けの雑誌等で女性家政学者らによって盛んに提案されていた。この動きは日本に限らず全世界的に共通する課題であった。例えば1930年代に登場

したドイツの「フランクフルト・キッチン」はテーラーシステムを家事労働に応用した事例として知られているが、これもまた女性建築家マルガレーテ・シュッテ＝リホツキーによる提案である。日本でも家政学者の三角錫子が1910年代に女中を廃した台所の家事効率について提案していることも特記しておきたい。

戦後になると、日本住宅公団の集合住宅にステンレスキッチンが標準装備されるようになる。ステンレス素材は水に強く、清潔感があり、戦前でも用いられていたが、高価で庶民には手の届かないものであった。しかし戦後になるとサンウェーブ工業ら企業による技術革新が急ピッチで進められ、大量生産の仕組みが成立し、バスタブなど他の水まわり設備機器でも用いられるようになっていった。台所流し台のデザインについては、シンク、作業台、調理台の配置が検討され、最終的に女性建築家浜口ミホによる「ポイントシステム」が採用された。これはシンクを中央に配したもので、実際の調理作業の様子を実験し、その結果をもとに提案されたプランであった。その後、電化製品が普及するようになると、台所はモノに溢れ、その置き場に困るようになっていった。電気洗濯機が「理想の台所」に装備されるものとして百貨店や家電メーカーでプロモーションされている時期もあった。

このように戦前戦後の台所改革の歴史を紐解いていくと、そこには必ず女性建築家や女性家政学者の提案があった。家庭の主婦が最も時間を割く家事労働が台所での調理作業であり、日常生活に不可欠な作業だからである。いかに効率よく合理的に家事労働ができるか、それらの課題に真摯に取り組んだのは、その担い手である女性であった。現在、電子レンジをはじめ、ロボットによる掃除機、全自動洗濯機など便利な電化製品が次々と開発されている。それに伴い、家事労働の軽減、時間短縮が図られていることは間違いない。女性の社会進出の機会は増加の一途をたどっているが、子育て支援等の社会制度がまだ整っていないことが懸念である。